校長室だより～燦燦～ №９６６

大丈夫だあ

2024.2.7

この前、ふと気がついた。「大丈夫だあ」という言葉を発していることが多いことに。先生方が、「校長先生、～をしてしまいました」「校長先生、～になってしまいました」のように報告と相談にくる。話を聞いた後に、まずは「大丈夫だあ」あるいは「大丈夫、大丈夫」と言っている自分がいる。

先生方は、内心「やってしまった」と反省しながら申し訳なさそうにくる。自分では、意識はしていないのだが、「大丈夫」という言葉を使っている。大丈夫と言いながら、善後策を考えている。そして、すぐに指示を出す。こういった展開が多い。

ここで考えてみた。もし、報告を受けた後に、「何をやっているんですか」という言葉を発したら、どうなるだろうか。きっと、私の中から、善後策も指示も出てこないような気がする。マイナスの言葉からは、プラスに向かう打開策は出にくくなるように思う。

「大丈夫」というプラスの言葉には、状況をプラスに転じさせるパワーがあるのではないか。また、こんなこともよくある。「それは、かえってよかったのかもしれないよ」という話になることがある。雨降って地固まるである。ピンチはチャンスという言葉があるが、まさしくそうである。たぶん、先生方は、そんなことは考えない。そんな余裕もない。

だが、私は常に「ちょっと待てよ、これは見方を変えればチャンスかもしれない」というような考え方をする。そうしないと、善後策や打開策など、そう簡単に出てくるものではない。先生方に「大丈夫」と言っておきながら、何も指示を出せないようでは、大丈夫にはならない。

とは言いながら、内心では「これは、まずい」という状況に陥っていることがある。それでも、考える。考えれば、打つ手はある。策は出てくる。そして、動く。動けば、意外と事態が好転してくる。あきらめないことである。ごまかさないことである。すぐに動くことである。

「大丈夫だあ」と言っているからといって、楽観主義者ではない。その逆で、常に最悪を想定して、最悪をイメージして動いている。何か起こったときも、まずは最悪の状況をイメージしてみる。すると、打つ手が見えてくる。「これはだめかもしれない」と思いながらも、やれることはすべてやっていく。そうしているうちに、一筋の光明が見えてくる。光が差してくる。何かに助けられている、救われているような気持ちになってくる。

このようなことで、今までに何度も危機を脱してきた。危機は、一度だけくるものではない。立て続けに何度もやってくる。小さい学校でも大きな学校でもやってくる。小規模の学校だからといって何も起こらないということはない。いつも危機と背中合わせの状態である。

「大丈夫だあ」何だか、気が抜けたような力が入らない言葉である。しかし、この言葉のもつ力はあなどれない。